令和５年度
静岡県立大学短期大学部

ＦＤ委員会報告

Ⅰ　令和５年度 FD 委員会活動について

令和５年度 FD 活動の基本方針

本学の FD 事業の目的遂行に向けて、PDCA の手法を視野に入れながら FD 活動のチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行う。昨年度に引き続き、本学 FD 推進のための企画や、授業アンケート事業を中心に実施する。

基本方針に従って実施した事業は以下のとおり。

・FD 講演会
・授業評価アンケート
・FD 新任研修会
・FD 資料展示
・授業参観
・「FD 活動報告書」の編集発行・公開
・委員会開催

以下にその詳細を報告する。

１．FD 講演会

・第 1 回短期大学部 FD 講演会

日時：令 5 年 7 月 20 日（木）16：10～17：00
実施形態：対面
講師：桜美林大学教育探究科学群　教授　小林雅之氏
演題：「変わる学生と大学改革の課題」
参加者：31 名

短期大学部では新学部構想が進んでいることを踏まえ、高等教育を取り巻く現状と大学設置基準の改正点を中心に講演していただいた。大学の質保証をめぐる政策の変遷とともに学修者本位への転換が行われたこと、学生調査など学生側のニーズを重視することや情報公開のあり方などの新しい動向、学生調査に基づく短期大学部の強み等についてわかりやすく説明された。事後アンケートからも各教員が新たな学びができたようであった。

・第 2 回短期大学部 FD 講演会
日時：令和 5 年 12 月 7 日（木）16：00～17：15
実施形態：Zoom
講師：愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室　教授　中井俊樹氏
演題：「学生主体の授業の工夫」
参加者：32 名

学生が主体となる教育の考え方や手法をわかりやすく説明された。授業中の発問の重要性、問いかけ方、協同学習を生かすための工夫など、理論に基づきつつ、実践例も交えて教えていただき、受講者は日ごろの授業を振り返るとともに、明日から使える具体的な知識を習得することができた。受講後のアンケートでも、回答者全員が参考になった、と肯定的な評価であった。

２．授業評価アンケート

令和 3 年度に内容の見直しを行った質問項目を用いて実施した。実施方法は、本年度も遠隔授業で実施された授業もあったため、遠隔授業に関する質問項目を残しつつ、対面方式で前期、後期それぞれ実施した。

３．FD 新任研修会

本学の教育力の維持向上を図るため、初任者 4 名（4 月：3 名、10 月：1 名）を対象に、教育理念や教育指導等、本学の教員として身に着けておくべき基本的な知識を習得するための研修を行った。

４．FD 資料展示

小鹿図書館と共催で、FD 資料展示コーナーを設置した。近年刊行された FD 関連書籍や FD 講演会講師の書籍の中から、小鹿図書館スタッフに選定していただき、3 月に実施した。

５．授業参観

教育の質の保証と向上をめざしてよりよい教育の実現につなげることを目的に、懸案事項となっていた授業参観を復活した。本年度はまず授業参観システムを確立するため、新任研修の一環として、新任教員（着任後 3 年以内）を対象に行った。

６．「FD 活動報告書」の編集発行・公開

昨年度と同様、授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成することを決定した。これまでどおり、①紙（冊子）②ＤＶＤ（ＣＤ-Ｒ）③

ＷＥＢの３種の媒体を作成する。

・授業評価に対するフィードバック
・授業評価アンケートの現状と課題
・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートへのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

６．委員会開催回数

４回

Ⅱ　学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

１．　アンケートの実施および教員にコメントの作成について

１．１．　授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法は、遠隔授業実施を踏まえて、遠隔授業に関する質問項目を残しつつ、対面方式で実施した。授業評価アンケートの内容は、令和３年度見直しを行った内容で実施した。

実施方法は次の通りである。

① アンケートの実施時期は、早期終了科目は授業第 8 週より、15 回実施科目は授業第 14 週より回答開始とし、回答期限を集中講義/補講/試験期間の最終日とした。
② 授業担当教員が授業ごと、授業終了 15 分前に学生にアンケート用紙を配布、説明をした。学生がアンケート用紙を回収し、封筒に入れて学生室へ提出する。
③ 学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄の転載を外部業者に委託する。
④ 業者から納品された教員個々のアンケート集計と自由記述を転載したものを封筒に入れ、ＦＤ委員会から各教員へ配布し、「教員によるコメント」の執筆を求める。
⑤ 上記①～④は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
⑥ 担当科目のうち、回答者が 5 名以下の場合は、集計を行わない。
⑦ システム上、授業科目ごとの評価となるため、担当教員 2 名以上で担当している科目は、履修科目一覧表の 1 番目に名前が記載されている教員に結果を渡す。

１．２．　授業評価アンケート用紙

昨年度見直しを行ったアンケート項目と同様に、3 つの大項目を設定し、「あなた自身の取り組みについて」(7 項目)、「授業について」(13 項目)、「遠隔授業の方法について」(3 項目)、計 23 の質問項目を設定した。各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「この授業でよかったと思うこと」、「この授業で改善が必要だと思うこと」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生のコメントを具体的に述べられる内容となっている。

授業評価アンケートで使用した質問項目

あなた自身について	1	自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ。
	2	自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。
	3	自分は、この授業を意欲的な態度で受講した。
	4	自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。
	5	自分は、予習復習（提出課題を除き）をして理解を深める努力をした。
	6	この授業の内容は良く理解できた。
	7	自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。
授業について	8	シラバスに授業の目的、授業の到達目標、授業の計画と内容、評価の方法が明示されていた。
	9	授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった。
	10	授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた。
	11	毎回の授業の量と範囲は適切であった。
	12	教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。
	13	教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた。（説明の仕方、授業形態、配付資料、板書、情報機器の活用など）
	14	教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた。
	15	教員から与えられた課題（宿題、レポート）は、質・量ともに適切であった。
	16	教員に授業に対する熱意が感じられた。
	17	教員は、学生に対して誠実に対応していた。（質問への対応、レポートへのコメントなど）
	18	成績評価の方法は適切であった。
	19	この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。
	20	安全についての指導や配慮が十分なされていた。（実習科目のみ回答）
№21～23 は遠隔授業が行われた科目について回答してください。		
遠隔授業について	21	遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった。
	22	遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた。
	23	遠隔授業での課題は、学生が主体的に学べるように配慮されていた。
その他の意見		
・この授業で良かったと思うこと		
・この授業で改善が必要だと思うこと		

１．３．　教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信する。

１．４．　公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『令和５年度ＦＤ委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

２．　教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

ｉ）専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

学科・専攻：一般教育等　　職名：教授　　氏名：林恵嗣
対象科目：体育実技（実技）、健康科学論（講義）

【体育実技】
　すべてのクラスで良い評価が得られたと考えています。昨年度も対面授業を実施することで、概ね良い評価となっていたことから、やはり体育実技は遠隔授業ではなく対面授業として実施することが重要と考えています。令和5年度は、すべてのクラスで、対面授業として実施したことで、今回のような結果につながったと考えています。特別な事情がない限りは対面授業で実施したいと思います。
　自由記述において、時間割についての改善要望がありましたが、この授業の都合だけで時間割を変更できるものでもありませんのでなかなか難しい問題だと理解してください。また、体育館の床についての改善要望がありましたが、こちらは対応済みです。

学生へ期待すること：授業の中で説明できること・教えられることには限界があるので、自分から調べたり、教員や上手な人・詳しい人に聞いたりするようになってほしいです。また、授業でも話をしましたが、身体を動かすことが心身の健康につながるため、授業外でも積極的に身体を動かすようにしてほしいです。

【健康科学論】
　令和5年度は、毎授業後にUniversal Passportで小テストを実施し、小テストの結果も成績評価項目としました。令和4年度よりも再試験対象者が少なくなったのは、この小テストによると考えています（令和4年度は授業後の小テストが任意で成績評価対象外）。今後もこのような形で授業内容の理解を深められるようにしたいと思います。このように理解が深まるようにしたことで、授業評価も概ね良い評価となったと考えていますので、今後も授業内容の理解が深まるような工夫を続けていきたいと思います。

学生へ期待すること：授業内容は難しいところも多々あるとは思いますが、授業内容が分からなかった場合には、まずはしっかりと復習をしてほしいです。プリントを読み返すだけでも随分と違ってくると思います。また、分からない点については、遠慮なく質問をしてほしいです。授業時間外でも対応します。

学科・専攻：一般教育等　　職名：准教授　　氏名：竹下典子
対象科目：子どもの食と栄養（演習）、生活支援技術Ⅲ（演習）

講義ではスライドを使用し、前期に学生からの要望もあり、講義スライドを配布している。しかし、スライド資料を配布すると、学生はノートを取る必要性が薄れ、退屈に感じることや集中力の低下が見受けられた。そこで、スライドの一部を穴埋めにして配布することにした。この変更については学生から好意的な反応があり、今後も継続して行いたい。

「あなた自身について」「授業について」の評価を見ると、『こどもの食と栄養』では学科平均を下回っていた。「自分は予習復習をして理解を深める努力をした」と「自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目が特に低いため、授業の振り返りや、質問に対する丁寧な回答や補足説明を通じて、学生がより理解を深められるよう努めたい。
コメントでは「調理実習が楽しかった」というような感想が多く挙げられていた。食や調理に親しんでもらうことも目標としているため、今後も学生が楽しく調理実習を行えるよう工夫したい。

「この授業で改善が必要だと思うこと」として、「デモが長い」、「調理実習の際の説明時間」というコメントがあった。本学では、調理や栄養のスペシャリストを養成しているわけではないので、調理経験の少ない学生や苦手な学生もいることを想定して、初歩的な注意も含め、詳しく説明しているつもりである。確かに、調理に慣れていて得意な学生には、冗長で退屈に感じるかもしれないが、そのような学生ばかりではないと考えられるので短縮することは考えていない。安全に調理実習を行うためにも、必要な時間だと考えている。そのような事情を学生が理解してくれることを期待する。

学科：一般教育等　　職名：講師　　氏名：有元志保
対象科目：英語（演習）

本科目では、英語運用能力の向上を目指して基礎的な演習を行う。英語を学びながら、異文化に対する理解を深めることも目的としており、今年度は、世界の国々の歴史や文化を文章と映像で紹介する教材を使用した。

シラバスでは、授業の到達目標として以下の項目を設定した。

１．授業で習得した語彙や文法知識を活用して英文を読み、内容を理解できる
２．短い映像を繰り返し視聴し、生の英語の聞き取りに慣れる
３．学習内容に関して、自分の意見を簡単な英語で表現できる
４．世界の多様な文化や人々に対する関心と理解を深める

１については、辞書で語の品詞や例文を確認したり、パワーポイントの資料を補助的に使用しながら英文の解釈を行ったりするなどして、わかりやすい説明に努めた。２については、発音の確認も交えながら、リスニングの練習を繰り返し行った。英語を母語としない人々へのインタビュー映像を通じて、英語の多様性についても理解を促した。３については、ペアワークやグループワークを実施し、英語で自分の意見を表現し、他者の考えを聞く機会を積極的に設けた。４については、テキストの内容に加え、インターネット上の英語で発信された情報を適宜参照しながら、学生の視野を広げ、発展的な理解につながるよう心がけた。毎回の授業で小テストとコメントシート、前期と後期の終わりにはテストを実施して理解度を確認し、それぞれフィードバックを行った。

各学科・専攻の授業評価アンケートでは、各項目について総じて高い評価が得られ、英語や外国の文化に関心を持つことができたという自由記述も複数見られた。今後も学生の主体的、積極的な学習を促しつつ、効果的な授業運営を目指して工夫を重ねていきたい。

学科･専攻:一般教育等　職名:講師　氏名:上田一紀
対象科目:情報処理演習(演習)、情報の活用(演習)、情報と生活(講義)、現代社会学(講義)

[情報処理演習](演習)

本科目の到達目標は、PC の基本操作、PC を用いた文書作成、データ処理（表計算、グラフ作成)、インターネットの利用、プレゼンテーション資料の作成を行えるようになること、である。

[情報の活用](演習)

本科目の到達目標は、クラウドコンピューティングシステムを PC とスマートフォン（複数端末）で活用できるようになること、情報の活用（情報の収集、編集、発信）に関する技法を習得し、コミュニケーションツールとして使用できるようになること、である。

⇒　全クラスにおいて、学科・専攻平均点を上回る評価を得ることができた。

⇒　自由記述にはプラスの評価が多く記されており、今後も継続して学生の主体性や当事者性を引き出しながら、教育を行っていきたい。

⇒　一方で、授業のペースの問題が指摘されている。PC スキルにばらつきがある受講生が 1 つのクラスに混在することにより、受講生各自が抱く授業の「進度」（進行・ペースの速さ）の感じ方に大きな格差が生じているという問題である。短大の時間割の関係上、能力別のクラス分けの実施が難しい。今後も継続して同問題の打開策を検討していきたい。

[情報と生活](講義)（※履修者が 5 名以下のためアンケート未実施）

本科目は、情報機器（PC やスマートフォン）やネットワークシステムの基本的な仕組みや特徴を理解すること、情報セキュリティや情報倫理を考える際の基本的な枠組みを理解すること、情報の法（情報法、メディア法）の基本を理解すること、を目的としている。

[現代社会学](講義)

本科目は、社会学的な考え方を身に付けること、社会学の基礎知識・代表的な理論を理解すること、社会学的思考を日常の出来事や現象に適用できるようになること、を目的としている。

⇒　いずれの項目も、学科・専攻平均点を下回っている。（Ⅰあなた自身について[当科目平均点 4.34]⇔[学科・専攻平均点 4.56]、Ⅱ授業について[当科目平均点 4.62]⇔[学科・専攻平均点 4.73]）とりわけ、「授業の難易度の適切さ」が 4.40 と低かった。

⇒　自由記述には、資料の見やすさや教材の適切さ、そしてグループワークの実施に関してプラスの評価が寄せられた。今後も継続して有用な教材の開発に努めたい。グループワークについても改良を加えながら今後も実施していきたい。

⇒　一方で、内容が難しいという意見が寄せられた。具体的にどの回の内容かは自由記述から明らかではないが、おそらく社会学の学説史や代表的な理論を扱う回であると推察される。初学者でも理解し易いように説明を工夫していきたい。

学科・専攻:一般教育等　職名:講師　氏名:高田佳輔
対象科目:社会調査の基礎(講義)

「I あなた自身について（学生が自身について回答)」

本カテゴリは，7 つの質問項目で構成される。そのうち，教員側から学生に対して何らかのアプローチが可能であると考えるのが,「3. 自分は, この授業を意欲的な態度で受講した」,「4. 自分は，疑問点を必要に応じて教員に質問した」,「5. 自分は，予習復習（課題提出を除く）をして理解を深める努力をした」,「6. この授業の内容はよく理解できた」,「7. 自分は，この授業を受けて，この分野に対する，関心が増した」という 5 点であろう。いずれも平均点は 5 点満点中の 4.50 から 4.65 であった。

「II 授業について」

いずれの項目も，平均点は 4.70 から 5.00 であった。

以上の概ね良い結果になった要因として考えられるのは，筆者が独自に行っている授業に対する工夫によるところが大きいと考える。筆者は次の 3 点の工夫を行っている。

第 1 に，学生が意欲的に授業に取り組めるように，毎回，アクティブラーニングを前提とした授業を展開し，毎回の課題においても次回の授業の冒頭で必ずフィードバックを行うことで，学生が能動的かつ意欲的に授業に取り組める環境づくりを行っている。関連して，クオリティの高い課題については，必ず授業中に紹介するようにしていることで，他の学生が「どのようにすれば良いレポートを書けるか」について学びが得られるような授業づくりを行っている。

第 2 に，“仮に”学生が授業中に教員の話を何一つ聞かなくとも，それを見るだけで当該回の授業内容を学習することができるような授業資料を作成・配布することで，誰一人取り逃がさない授業を展開した。関連して，やむをえず授業を欠席・公欠する学生に対して，学習の遅れを取り戻せるようにこのような授業資料づくりを行っている。

第 3 に，学生のリアクションペーパーに書かれた要望に対して，極力その要望を授業に取り入れることで学生のモチベーションを向上・維持を狙っている。

さいごに，自由記述に関しても良い評価を得られた。例えば,「難しい内容に対して質問したら優しく答えてくださってありがとうございました。」,「なんでも質問を受け入れて下さる。沢山誉めてくれる。よかったところをみんなに教えて下さるのでモチベーションになる。分かりやすい授業。」,「資料が分かりやすかった。褒めて下さるおかげで意欲的に受けることができました。」,「一番楽しくおもしろい授業だった。ありがとうございました。」,「難しかったけど説明が分かりやすかった。」,「内容は難しかったですが，とても勉強になりました。ありがとうございました。」など上記の教員の工夫が効果的であったことが，学生の自由記述からも読み取れよう。今後も学生の要望を取り入れながら，授業内容は難しいながらも受講している学生が学びを楽しいと思えるような授業を展開していく。

学科：歯科衛生学科　　職名：教授　　氏名：仲井雪絵
対象科目：①臨床歯科医学序論（講義），②小児歯科学（講義），③口腔衛生学I（講義），④口腔衛生学II（講義），⑤口腔発達学（講義），⑥臨床歯科診査法（講義），⑦救急処置法（講義・３名で分担）⑧歯科保健指導実習（実習・分担；2 コマを主担当）⑨臨地実習基礎（実習・分担）⑩臨地実習応用（実習・分担）⑪臨地実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（実習・分担）

I　授業の目標・工夫

令和５年５月８日より新型コロナウイルス感染症の位置づけが，それまでの「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる２類相当）」から「５類感染症」になった．それでも困難な環境であることに変わりは無かったが，意欲的に教育改善の挑戦を続けた．上記の授業科目に関しては，感染拡大に配慮しつつオンデマンド型授業を柔軟に盛り込みながら可能な限り対面授業を実施した．医療系大学間共用試験実施評価機構委員の協力を得て 上記⑥の中で模擬患者参加型アクティブ・ラーニングを対面で実施し先端的な医療面接および動機づけ面接法の学修機会を実施した．

上記⑪臨地実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて言及したい．一昨年度新規導入した歯科衛生ケアプロセスの段階的学修方略を引き続き実施した．1 年間かけて少人数制ゼミ形式で歯科衛生ケアプロセスを習熟する教育方略は学修効果が極めて高いと改めて実感した．ただ新年度になり臨地実習Ⅰが始まった時期に，科目担当責任者と自称する学科教員とその他数名の方々（A 群）によって，症例資料を使用する帰校日指導を阻止され続け，話し合いの場である学科会は何度も紛糾し，教員と学生に大変な混乱が生じた．もとより臨地実習における患者情報の取り扱いは法令に則っているが，A 群が常に反対し，教育計画の遂行に足並みがそろわない状況が２年続いた．
当時の事務部長と短期大学部長を介して県大経営人事室（個人情報保護法の専門）に確認し，我々が主張してきた従来のやり方に問題は無い，との回答を得た．それでも A 群は納得されなかったので，県立大の顧問弁護士へ照会を行うに至った．当然結果は同じであった．
後期の実践実習報告会も阻止されかけたが，短期大学部長のご尽力で開催できた．報告会では下級生の質疑応答も質が高かった．
複数学年にまたがる貴重な学修機会を死守でき，その結果学生達の喜びと満足な声を聴くことができ，一緒に教育を守ってきた仲間達とささやかながら満足している．

II　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

自主的な予習を支援するために，すべての担当科目において各講義回の 2 週間前までに該当する配布資料を学務システム（UNIVERSAL PASSPORT）にアップロードした．さらに同システムから小テスト形式の課題を作成し，ICT を活用していつでもどこでも復習できる環境を整えた．

『無理に売るな．客の好むものも売るな．客のためになるものを売れ.』これは松下幸之助の名言の一つである．私は常々，これは教育に当てはまる言葉だと考えてきた.『学生を喜ばせる教育

をするのではない．学生のためになる教育をするのだ.』と．この授業アンケートが，教育が学生のためになっているか否かを評価する尺度として妥当なものであるならば，実施の意義はあるだろう．

III　学生に期待すること・学生への要望等

大学は，専門知識や技術だけを学ぶ場所ではなく，自らの意思で生きる力を養う修練場である．本当に重要なことは教科書（書籍）に載っていない．現場の患者（対象者）こそ最上の教科書である．現場での知識の使い方，判断に至る思考過程，正解のない問題への立ち向かい方，失敗からの立ち上がり方・活かし方等を真の実務経験者から学んでほしい．

学科・専攻：歯科衛生学科　　職名：教授　　氏名：野口有紀
対象科目：歯科衛生学総論（講義）、地域歯科保健論（講義）、地域歯科保健実習（実習）

Ⅰ　授業の工夫など

専門分野における知識・技能・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、講義と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の基幹統計や一般統計など調査結果およびエビデンスレベルの高い原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を作成した。
- 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう授業内でマークシート形式のプレテストとポストテストを行った。プレテストおよびポストテストは国家試験に準じた形式で行った。小テストの解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用いた。
- 事前学習として必要な部分を自ら判断し、事前学習するように促し、修得した基礎科目の知識の見直しを課した。
- 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- 理解度に合わせた指導の工夫として、机間指導を行い質問しやすい環境を設定するとともに、オフィスアワーを設定し丁寧な対応を心掛けた。
- 成績評価の工夫として、筆記試験のみに偏向しない多元的成績評価をした。

Ⅱ　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業アンケート集計結果の「Ⅰあなた自身の取り組みについて」「Ⅱ授業について」のすべての項目において、学科平均点より高い傾向がみられた。「Ⅱ授業について」では 4.83～4.90 であり、特に「授業の難易度は適切であった」「学生の理解度に配慮して授業を進めていた」「理解が深まるように授業方法を工夫していた」「授業に対する熱意が感じられた」「学生に対して誠実に対応していた」「評価の方法は適切であった」では非常に高い平均点であった。工夫した授業運営により、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。また、個人の学びの進度に合わせ、対応できるようオフィスアワーやコメントシート等利用し、各学生への取り組みにも重点を置くよう努めたい。

Ⅲ　学生に期待すること・学生への要望等

事前学習・事後学習などの課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てるよう、能動的な学習ができるようにして欲しい。

学科:歯科衛生学科　職名:教授　氏名:吉田直樹
対象科目:生化学（講義)、口腔生理学（演習)、口腔微生物学（講義)、微生物学（講義)、
歯周治療学（講義)、歯科衛生統計学（講義）

Ⅰ　授業の目標及び授業において工夫していること

歯科衛生学科の学生は、卒業すると、「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。担当科目においては、国家試験に直結するものが多いため、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、ひとつの大きな目標としている。理解しやすくするためには、要点を示して簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまっては、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後にも永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるし、否定されることすらあり得るのだということを、理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画を活用している。また、OHC（Over Head Camera）を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」することもある。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、学生の集中力が維持されるように工夫している。

また、90 分授業においては、前半と後半に分け、授業の中頃に、質問を受け付ける時間帯を設け、講義室内を巡回することによって、学生が疑問点を解決しやすいようにしている。このことによっても、集中力の低下を防げるのではないかと考えている。

Ⅱ　授業についての自己評価と今後の改善･工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、概ね良好であったと考えている。

今後の改善としては、学生が講義を受けた後に、その分野に関して自主的に学びたいと思うような授業を行いたい。理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を充分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するということにたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考えている。

Ⅲ　学生に期待すること

多くの学生において「丁寧な授業」言い換えれば、「痒い所に手が届く」授業を、良いと考える風潮があるのではないかと感じている。このことは、決して理想的なことではない。

上記のように、「授業において工夫していること」の中で、「学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、学生の集中力が維持されるように工夫している。」述べたが、これは、実は理想的ではないのである。理想的には、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることが望ましいのである。

学生が、自主的に学ぶという方向に持っていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けるなかで、自分自身で能動的にノートをとれる能力を身に着けることを希望する。

近年、本学に限ったことではないが、様々な状況において、学生が容易に理解できる授業を行うという方向に、教員が向かわされているのではないかと、危惧している。マニュアルが無いとうまくできない部類の人を生み出す、手助けをしてしまっているのではないかと感じることがある。

学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしないようではいけない。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。社会人になってからは、そのような能力は必須であろう。

学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちが生まれることを希望している。そして、それを持ち続けることを希望している。

学科・専攻：歯科衛生学科　　職名：准教授　　氏名：金山圭一
対象科目：病理学（講義）、歯科材料学（講義）、歯科保存学（講義）、災害時歯科保健（講義）、口腔病理学（講義）、救急処置法（講義）、歯科材料学（実習）

アンケートを回答してくれる学生さんへ

大人になると、フィードバックを受ける機会はまれになります。人として賢明かは、どれだけ他人からのフィードバックを受け入れられるかだと思っています。フィードバックを受けて、自分の行動をどれだけ変えられるか、自己修正できるかということです。

それゆえ私は、アンケートの率直な（時には厳しい）、建設的な意見というものを大いに歓迎します。皆さんの意見は、次の授業のレベルアップの“もと”になります。私の拙い講義が、少しは賢い教え方に変わって行くわけです。厳しい意見も『フィードバックを参考に良くなって』というメッセージと受け止めます。

私はこの授業アンケートを
・自分は「もっとよくなりたい」という欲求を持ち続けているか？
・自己修正サイクルを止めた化石になっていないか？　という自分への問いかけの手段と考えています。

学科・専攻：歯科衛生学科　　職名：准教授　　氏名：長谷由紀子
対象科目：歯科衛生過程（講義）、歯科保健指導論（講義）、口腔保健管理学実習（実習）、臨地実習基礎（実習）、臨地実習応用（実習）

【授業の工夫】

歯科衛生過程では，反転授業とその補足講義，事例に基づいた個人・グループワークを中心に授業を進め，論理的な歯科衛生実践の考え方のトレーニングとなるよう，積極的な参加を促すように工夫して実施した。また，口腔保健管理学実習では，歯科衛生過程の学習を応用して歯科衛生実践の根拠を念頭におき，歯科衛生士の専門性に基づく歯科衛生ケアプロセスや保健指導の立案など論理的な考え方を重視して講義・実習を行った。定期的に学生が取り組んだ課題（ポートフォリオ）を提出してもらい，各学生の学習状況（成果）の把握とフィードバックを行い，個人に合わせた指導と学生の能力向上に努めた。

臨地実習基礎では，早期体験実習の目的を果たすため，学生が本実習の意義を理解し，ポジティブな気持ちで実習に向かえるよう，学習への動機付けのために丁寧に説明や学習支援を行った。

臨地実習応用の学校歯科保健実習では，1年次までおよび同時期に履修した科目の学習内容を活用し，対象者に合わせた歯科保健行動に関する「ねらい」を達成するための指導方法を学生たちが主体的に立案，実践するための学習支援を行うよう心掛けた。

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

今回，自由記述の感想から，学生一人一人の学習状況の把握とそれに応じた形成的なフィードバックは継続して実践していきたいと感じた。今後は，提出された課題や学習ファイルからだけでなく，授業中にもなるべく個々の学生の学習状況を確認，把握し，その場で適切なフィードバックが可能な限りできるよう，教員側からのアプローチとともに学生からコメントや質問をしやすい環境つくりに努めていきたい。授業内容の難易度については，学生の理解度に応じた分かりやすい説明と伝達能力，状況に応じた指導方法を引き続き研鑽していくべきである。授業課題の質と量については，随時学生の様子や状況を把握し，学生の認知的負荷を鑑みて，学生の確実な能力獲得には妥協せず，それに相応しい課題の提示と学習支援が行えるよう尽力していきたい。また，学内の講義・実習の学習内容が実際の臨床現場の実践に結び付くよう，これまでの臨床実践経験や医療者教育の知識やスキルを活用し，学生の能力を向上させていくことが必須と考える。

【学生に期待すること】

受動的な学習では無く，学習の目的を理解し，主体的な学習の実践をお願いします。

学科・専攻：歯科衛生学科　　職名：講師　　氏名：松原ちあき
対象科目：高齢者歯科学（講義）、障害者歯科学（講義）、障害者歯科保健介護論（講義）、障害者歯科保健介護実習（講義・演習）、口腔介護予防・リハビリテーション法（講義・演習）

1．授業の工夫

上記すべての講義において、「高齢者・障害者に対する口腔健康管理に必要な知識を得る」といった内容を目的として講義・演習を実施した。

講義内では、基礎的な疾患や法律に関する知識を実際の臨床での事例や症例を提示しながら、定着を図った。症例では、実際に実施しうる口腔機能管理を検討する課題を与え、アクティブ・ラーニングを促した。

演習では、口腔健康管理の中で口腔衛生管理および口腔機能管理に分け、使用する器具や検査機器、口腔衛生管理用品について、実際に体験また相互に演習を行い、技術修練を行った。また介護・福祉やその他専門領域に優れた教員や専門家と連携し、講義・演習を実施することで、スペシャルニーズのある者に対する支援のあり方について幅広く知識を得る機会を作った。また高齢者・障害者の分野では専門的な研究が日々アップデートされているため、専門の講師を招致し、臨床のイメージや最先端の研究に関する情報を得るための機会を作った。

2．授業についての自己評価と今後の課題・工夫

授業アンケート集計結果から、実際の現場での様子を踏まえた講義展開について評価を得た。自らの臨床経験上の知識や技術について提示しながら講義を展開しているが、今後日々アップデートする高齢者・障害者歯科分野の臨床現場の状況やエビデンスに基づく情報発信を行えるよう、常に臨床・研究業務への研鑽も積んでいきたい。

昨年度と比較して歯科衛生士国家試験の出題範囲や教科書の改訂が行われ、高齢者・障害者に関する出題範囲が広くなったことを踏まえ、国家試験や教科書の変更に応じて重要な分野に関する講義内での比重の変更などを実施した。

3．学生に期待すること・学生への要望等

授業内で分かりにくい点や改善点等に関する意見をいただきたい。高齢者、障害者といった専門分野に特化した科目のため、臨地実習などでの関連性が明確になりにくいところがあると考える。将来の歯科衛生士としての活動を念頭におきながら、より分かりやすく講義が展開できるように進めていきたいと考える。

学科･専攻:歯科衛生学科　職名:講師　氏名:山本智美
対象科目:歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齲蝕予防処置実習(実習)、歯科保健指導論(講義)、歯科保健指導実習(実習)、口腔保健管理学実習(実習), 臨地実習基礎(実習)、臨地実習応用(実習)

歯科口腔疾患の予防について，その重要性を知る機会として歯科疾患実態調査の結果から把握できること，そのことから今後の課題を推察した。また自身の口腔内を観察する機会を設け記録することにより，自身の口腔内への意識が向上したと思われる。また歯磨剤の効果的な使用方法を体験することにより効果と問題点等を実感し，セルフケアや 2 年次の歯科保健指導実習につなげることができたと思われる。また，各ライフステージにおける口腔保健管理について事例 (課題) に取り組むことにより問題点や改善点を検討し、人々の生活、環境，保健行動等と歯・口腔の関わりについて関心が深まったと思われる。

「歯科保健指導論」の課題（評価）としてポイントを各自整理したノートの提出を求めたところ，ノートづくりが知識の確認，定着に役立った等のコメントが寄せられ，ノートづくりの効果を実感した。歯科保健指導論での学びをベースにセルフケアの見直し，歯科衛生士の立場での歯科保健指導等を考察できたと思われる。また，実習内容の動画視聴を事前学習課題としたことにより，実習への心構えや注意点等を事前に把握し実習に臨むことができたと思われる。

相互実習では術式、操作方法だけでなく，相手の立場になって声掛けしたり伝えることの大切さを学び，安全で確実な操作を行うこと，注意事項等について各役割を体験することにより理解が深まったと思われる。実習中はモニターに手順等を写し，確認しながら実習が進められるよう工夫した。

新カリキュラムで導入した「臨地実習基礎」（患者実習)，「口腔保健管理学実習」（合同実習）では 1 年生は患者としての体験と先輩を将来の自身に重ね合わせ，歯科衛生士を目指す者としての心構えを新たにする機会となった。

2 年生は前期に学修した歯科衛生過程を合同実習で実践し，情報収集，分析，計画立案，実施，評価と一連の過程を通じ，困難ながらも経験から得た学びは大きいと感じた。

「臨地実習基礎」歯科医院見学実習においては，臨床現場での歯科衛生士業務を見学したことにより，学んだことが臨床現場でどのように役立つかを知る機会となった。

終了後の報告会では，グループワークで目指す歯科衛生士像を明確にし，学生全員で共有することができた。

「臨地実習応用」（介護予防推進事業実習）では，地域の在宅高齢者が集う通いの場の見学により，参加者等のアセスメントを行い，口腔機能向上のための計画立案、実施、評価まで一連のプロセスを体験することができた。

参加者（高齢者)、学生双方にとってコミュニケーションの機会を共有できる大変有意義な実習であり，介護予防の視点で歯科衛生士が地域で活動することについて考える機会とな

ったと思われる。

新カリキュラムにおいて基礎から思考過程を実践する力，地域包括ケアのベースとなる学修を推進することができたと思われる。今後も学生が自ら疑問を持ち，解決する力を身につけられるような授業を展開するとともに，学生の予習、復習を習慣とする授業態度に期待したい。

学科・専攻：歯科衛生学科　　職名：助教　　氏名：鈴木桂子
対象科目：歯科診療補助論（講義）

【授業についての自己評価】
最終講義でのアンケートの記入に際しては、自由記載の欄に一言でもいいのでコメントをとお願いして実施しています。
ほぼ全員の学生さんがコメントを書いてくれているようです。
1年後期の専門科目の講義ですので、まだまだこれから多くの机上の勉強を積んでいかなければならないところです。そんな中での歯科診療補助論の講義は、歯科医療の現場で働く者としての将来像を描けるものになるよう、教員自身の経験やエピソードを交えながら講義を進めています。
歯科衛生士として働いていた時のわたくしの経験談（失敗談も含め）は、感銘を受けた学生さんもいるようで、そのことについてのコメントもありました。

【改善・工夫】
R5 年度からの新たな取り組みとして、それまで講義ごとに配布していた資料を 1 冊のノートとして授業の初回に配布したことがあげられます。
全8講の講義内容は、全てそこに入っており、授業では資料に書き込みながら理解が深められるよう進めました。ノートがあることにより、あらかじめ次回の講義内容に目を通し、予習をすることも可能になったかと思います。
また、90 分の講義途中で飽きないように、巷で流行っている脳トレを、講義の合間にちらほら入れ込みました。このことについて、大変効果的であったという意見が多数ありました。
学生さんの言葉は励みにはなりますし、次年度もさまざまな工夫を考え実行するよう努めていきたいと思います。授業については学科専攻平均点 4.80 を上回る 4.94 ということでしたので、これに甘んずることなく努力して参りたいと思っています。

学科・専攻：歯科衛生学科　　職名：助教　　氏名：鈴木桂子
対象科目：歯科診療補助・支援実習Ⅱ（実習）

【授業についての自己評価】
2 年生前期の歯科診療補助支援実習Ⅰと同様、毎回内容の異なる実習を行っていきます。
第1講での、寒天・アルジネート連合印象に始まり、歯科保存修復時の診療補助、歯のホワイトニング、歯科麻酔時の診療補助、歯科用合着材など様々で、同じ実習を回数重ねて行っていくことは出来ませんが、これ等の実習が 3 年次の臨地実習へとつながり、ひいては就職先での歯科診療の補助へとつながる実習です。
1 つの実習内容について時間をかけて深く掘り下げていく事はなかなかできないものの、逆に毎回違った内容の実習をすることで新鮮さもあると考えています。
アンケートでは授業についての学科・専攻平均点 4.80 のところ本実習では 4.90 となっており、特に高かったのは「安全についての指導や配慮が充分なされていた」が 4.97 という結果が出ていました。
自由記述の中では、生徒の知識や技術向上のため、親身になって授業してくれたといったような記載があり、このことは自分自身の大きな励みとなりました
今後もアンケート結果を生かした実習を続けていきたいと思っています。

【改善・工夫】
「口腔外科治療時の診療補助」の実習を例にとると、実際の鉗子を手に取って理解していくのが最善の方法ですが、難抜歯に使用する器具を何セットも揃えておけるわけではありませんので、実物の器具を見学しているグループの傍らで、待ち（空き）時間のある場合が出てきます。そういう場合に時間を有効に利用できるよう、当該科目に関する問題ドリルを作成し、待ち（空き）時間におこなってもらうなどの工夫を常に考え実施いたしました。

学科・専攻：短期大学部・歯科衛生学科　職名：助教　氏名：藤田美枝子
対象科目：歯周疾患予防処置論（講義）、歯周疾患予防処置実習Ⅱ（実習）

1.　授業の工夫

対象科目となる2科目は、歯科衛生士の主要業務である歯科予防処置のうち、歯周病予防に関する科目である。講義では歯周病予防に関する理論とその方法について理解すること、実習科目では手技・技能を修得することを目的としている。

- 授業開始時に前回の授業内容に関するミニテストの実施及び解説を行い、事後学習の促しと、知識の定着を図った。
- ユニパの掲示を活用し、ミニテストの範囲、予習復習のポイントについて、都度周知を行った。
- 講義科目では授業終了時にコメントシートを記載してもらい、学生の授業内容に関する疑問点等を把握し、補足説明を行うなど、疑問点が残らないように工夫した。実習科目では、振り返りシートを活用し、実習に臨む前に自ら目標を立て、終了後に振り返りを行うことで、能動的な授業参加を促した。
- 実習科目の成績評価の工夫として、筆記試験だけでなく、実技試験を実施し、技能の定着についても評価を行った。
- 実技試験では、ルーブリックを作成・活用し、評価の客観性、公平性に配慮し、学生へのフィードバックを行った。
- 動画教材を活用したり、器材に触れたりすることが可能な場合には実際に器材の操作体験を取り入れ、学生の理解が深まるよう、工夫した。

2.　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業評価アンケート集計結果より、Ⅰあなた自身の取り組みについて、Ⅱ授業について、両科目とも概ね良好であった。アンケートの自由記述には、特にミニテストにより知識の定着につながった、コメントシートへの返信が丁寧であったとの記載が多かった。上記の授業の工夫により、理解が深まったと思われる。

今後の改善点として、2 科目とも「自分は授業を受けるにあたりシラバスを読んだ」、「自分は、予習復習をして理解を深める努力をした」の項目が、他の項目と比較して低かった。シラバスを読むよう促したり、実習科目であっても、事前・事後学習の継続を促したり、質問をしやすくしたりする工夫が必要であると感じた。

3.　学生に期待すること・学生への要望等

講義では、毎回新しく覚えることが多いため、前回の授業の内容を理解していないと、ますます授業についていくのが難しくなります。ミニテストなどで復習し、知識を定着させながら進めていきましょう。他科目ともオーバーラップする内容がありますが、歯周病予防の観点から考えることで学びを深めていけると良いと思います。実習では、まず器具の把持方法、固定など、基本的な操作方法

を身につけましょう。実技試験を受けるのが初めてで緊張する人も多いと思います。実技試験では、「自分ができていないところ」にばかり着目しがちですが、「自分ができるようになったこと」を認める機会にしてもらえると良いと思います。

学科・専攻　社会福祉学科　社会福祉専攻　職名：教授　氏名：松井順子
対象科目：高齢者の生活の理解Ⅱ（講義）

自由記述のご意見に対する回答

学生のみなさんから頂戴したコメントは「分かりやすかった」「高齢者が関わる法律について学べてよかった」「グループワークを通して理解を深めることができた」「スライドが見やすい」など、他にも授業の工夫や努力を評価してくれるものが大半でした。

一方、「授業を始めるのが、とてつもなく早い。印刷がへたくそ。スライドが小さくて見えないのに、進むのがすごく早い」「復習で90分使っているから、実質復習になっていない」と、授業の改善を求めるコメントが、2名の方から寄せられていました。

授業評価は個々に異なりますし、改善が求められている点は、私自身、謙虚に振り返りたいと思います。確かに、私は復習に重きを置いていますが、仮に90分復習していたとすれば、当該科目を終えることはできません。また、上記の肯定的なご意見を勘案すると、改善を求めておられるご意見に対する疑問もあります。

例えば、「授業を始めるのがとてつもなく早い」というご意見は腑に落ちません。授業が始まる前の休み時間に教室に行き、授業の準備を始めて、時間が来れば授業を開始するのは、授業を提供する教師が教育内容を担保するための基本的な姿勢です。むしろ、みなさんのなかから「3時間目4時間目が演習で、その後の5時間目にこの授業はしんどい」という声が出ていたことを、私は記憶しています。確かに、後期の月曜は授業が5時間詰まっていて、午後から演習が2時間続き、その後、私の内容盛沢山の授業で、時にはグループワークも行うので、それをしんどく感じる気持ちも理解できます。

今年度、「高齢者の生活の理解Ⅱ」は前年度と同様で、月曜5時間目に配当されていますが、学生のみなさんの心身の負担量を改めて考え、当該科目の配当曜日と時間について、再検討を学科に求めることを、みなさんにお約束をします。そして、私自身は復習時間が適切であるか否かを含め、今後も授業の在り方とその内容の改善・充実を念頭に置いて、科目を担当します。

この度は多様な方向から授業を考える機会につながるご意見をいただき、ありがとうございました。

学科名：社会福祉学科　　職名：教授　　氏名：松平千佳
対象科目　ソーシャルワーク論Ⅱ　ソーシャルワーク論Ⅲ　ソーシャルワーク演習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ　障害児保育　子育て支援　ソーシャルワーク実習指導　ソーシャルワーク実習　学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)Ⅱ(障害児編)
　社会人対象ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

１．全体的な感想
コロナウイルスの影響がまだ学生に続いていると感じている。マスクを外すことができない理由は単に感染症を恐れてではなく、自分の顔を見せることへの抵抗感があると学生は話している。これは社会福祉学に基づく援助実践を学ぶ学生にとっては、大きな障壁となりえる思考である。学生は知識は持っているものの、実践に必要なソーシャルスキルを身につける機会が少なかったであろう。多くの学生がコミュニケーション能力に自信を持っていないことにより、対人援助者としてのスキルを教える際に注意が求められている。
2. 授業の工夫
　ソーシャルワークの授業では、学生たちが理論と実践の知識を深め、成長する機会を作り出している。そのため、社会福祉の基本理念や対人援助技術、ソーシャルワークによる問題解決について学べるよう学生の身近にあるトピックを用いることが多い。ソーシャルワーク系の授業を通して、学生は多様な社会的課題に対する理解を深め、適切な介入方法を考え、個別支援計画に落とし込む力を養っている。ロールプレイ、ケーススタディやグループディスカッションを積極的に取り入れ、批判的思考能力とコミュニケーションスキルを向上させ、将来の専門職としての自信と責任感が育まれるよう工夫している。
３．実習教育
　ソーシャルワーク実習を通じて、学生たちは顕著な成長を遂げ戻ってきている。実習では、多様な背景を持つクライアントに対応しながら、自己覚知を深め対人スキルを磨くことが求められる。学生たちは、厳しい現実が突き付けられる現場経験の中で自己の限界を認識しながら、クラインアントとかかわる喜びも体験し、専門的な知識と技術そして態度を獲得していく。クライアント個々の課題に対する理解を深め、クライアントとの信頼関係構築に努めることの重要性を学ぶことにより、ソーシャルワーカーに求められる態度が養われていく
４．学生へのメッセージ
　さまざまな生活課題に直面しながら、一生懸命に勉強するみなさんに敬意を覚えます。常に自分自身と向き合った 2 年間だったと思いますが、自己覚知を深めることは、ソーシャルワーカーがクライアントとの関係を築く上で信頼感を高めるのに役立つでしょう。他者への共感や理解が深まり、より効果的な対人援助が可能となるのです。何よりも皆さんが自分自身の問題と向き合い解決していくための力となります。皆さんは確実に成長し、たくましく、しなやかな力を獲得したと感じています。

学科・専攻：社会福祉学科・社会福祉専攻　職名：准教授　氏名：江原勝幸
対象科目：社会福祉原論 II（講義）

Ⅰ　授業の目標・工夫など

この科目は、専攻学生の卒業必修科目であり、前期「社会福祉 I」で学んだ社会福祉の原理・原則、歴史、制度など基礎構造を理解した上で、身近な現代社会の問題から広義の福祉の視点で問題の本質を理解し、必要な支援を考える発展的な内容としている。授業目的は 1）社会問題と社会構造の関係の視点から、現代社会と福祉支援について理解する、2）福祉政策の概念や理念について理解する、3）福祉対象者のニーズに応じた福祉政策の構成要素・過程について理解する、4）福祉政策の動向と実施課題について理解する、5）福祉サービスの供給と利用の過程について理解するとし、その到達目標は、「自分自身の生活から社会福祉について考え、自分の言葉で社会福祉とは何かを述べることが出来る」及び「新聞記事・報道番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、広義の福祉の視点から現代の社会問題と福祉政策の現状と課題を考察することができる」としている。

令和 5 年度は全 15 コマ対面授業で実施した（障害当事者及び支援者のゲストスピーカーを含む）。授業は常に現代の社会問題を取り上げるため、授業の目的・目標は押さえつつ、シラバスに示した授業計画通りでないアップデイトなトピック（新聞記事・映像資料）を取り上げる方式をとっている。このことは授業開始時に学生に説明し理解を促しており、授業評価アンケートの自由記述「文だけでなく動画を用いて現代の福祉の課題について知ることができたので、とても理解しやすかった」「動画を見ることで、具体的なイメージを持つことができた」など学生の問題意識を高めるのに役立っていると思われる。提出課題は「福祉のコトバ：人編」と「福祉のコトバ：法制度編」を出し、学生自らが調べたものを共有化できるよう簡易冊子にしている。また、これまでの授業評価において社会問題に関するビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、昨年度は「人権、自殺、過労死、保護司、保健師、知的・発達障害、新出生前検査、特別支援教育、ながらスマホ、ゲーム依存」を取り上げ、その背景・要因、現状、支援、課題など社会福祉の視点で捉え、考えをまとめさせ、個々にコメントを付けて返答した。

Ⅱ　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生評価では、「I あなた自身」で専攻平均点を 0.10p 上回り、＃2（出席）・＃3（意欲的態度）・＃7（興味・関心）が 4.75 と高く、＃4（質問）が最も低く 4.15 であった。「II 授業」も学科・専攻平均点 0.03p とわずかに高い。4.75 と評価の高い質問項目は＃11 と＃19 が 4.75、一方最も低い項目は＃8（シラバス明示）と＃10（シラバス展開）が 4.55 であった。自由記述からは「わかりやすかったです。防災の方協力できて良かった」「内容がわかりやすい」「福祉の様々な問題に対し、理解をふかめることができた」と福祉専門職に欠かせない福祉防災やわかりやすい授業であったことが伺える。評価の低かった項目について、学生が質問しやすいようワークシートへの質問を促し、シラバスに基づく授業展開を押さえつつ即時性のある社会課題への理解を深めることに努めたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻　職名:准教授　氏名:中澤秀一
対象科目:社会保障論Ⅰ（講義）、社会保障論Ⅱ（講義）、社会保障論（講義）、公的扶助論（講義）、公的扶助（講義）

新型コロナウイルス感染症の５類への移行後、授業形態は対面形式を基本とした。ただし、実習先の都合により実習期間の分散がみられるようになったほか、障害修学支援対象の学生からの要望もあり、引き続きオンデマンド形式（動画配信）にも対応できるように準備を行った。オンデマンド形式でも、単に動画を視聴して終わらないように、課題についてはGoogleフォームを使って提出させることで学習効果を高めた。また、前回の内容に関する復習テストを実施し、学習内容の定着に努めた。

授業評価アンケートの結果では、「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」については、社会保障論Ⅰ（社会福祉専攻１年）で**4.62**（4.27）で、前年度よりも平均点が上昇した（括弧内は昨年度の平均点）。また、教え方については、「**学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた**（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論Ⅰ（社会福祉専攻１年）で**4.75**（4.47）と、こちらも前年度と比較して平均点が上がっている。他の科目でもおおむね高い評価が得られている。引き続き、工夫を重ねていきたい。

アンケートの自由記述欄によると、「この授業として良かったと思うこと」として、**「毎回、前回の内容の復習テストがあり、おさらいすることができた」「前回の復習テストで確認できること」**などのコメントがみられた（社会福祉専攻１年「社会保障論Ⅰ」および社会福祉専攻２年「公的扶助論」自由記述欄より）。また、授業資料として用いた動画については、**「動画などが多くあり、分かりやすかった」「時々、動画を見る機会もあったので、より授業内容の理解を深められた」**などのコメントがみられた（社会福祉専攻１年「社会保障論Ⅰ」および介護福祉専攻２年「公的扶助」自由記述欄より）。評価が高かった授業構成については、今後も継続されていきたい。

「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」については、社会保障論Ⅰ（社会福祉専攻１年）で**4.57**（4.27）で、前年よりも平均点が上昇した（括弧内は昨年度の平均点）。引き続きシラバスに沿って展開できるように心がけていきたい。また、教え方については、「**学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた**（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論Ⅰ（社会福祉専攻１年）で**4.75**（4.47）と、こちらも前年度と比較して平均点が上がっている。いっぽう、同じ項目で公的扶助論（社会福祉専攻２年）では、「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」は**4.44**と前年度の4.79から評価が下がっている。すべての科目においてより高い評価を得られるようにするために、常にチェックを怠らず、見直しを課していきたい。

学科・専攻：社会福祉学科社会福祉専攻　　職名：講師　　氏名：佐々木将芳
対象科目：障がい児保育Ⅰ（演習）、ソーシャルワーク論Ⅳ（講義）、児童福祉論（講義）

講義におけるねらいと工夫

障がい児保育Ⅰは1年生が受講する科目であり、保育やソーシャルワークの実習に臨む前に、障害についての基本的な理解や具体的な援助内容を理解することを目的としている。そして、「障害」についての基礎的知識を習得する過程で、これまで学生自身が抱いていたであろう「障害」に対するイメージを再構成することも意図している。さらに、それらの理解を基盤として、保育現場における子どもへの事例から学ぶことで、実習や就職後の実践への具体的なイメージを養えるよう行っている。

ソーシャルワーク論Ⅳは 2 年次（後期）配当のため、ソーシャルワーク実習を終えた学生に対してソーシャルワークの発展的理解と価値・技術の再確認、そして実践者とし現場に向かうための心構えを持つという位置づけで講義を行っている。

児童福祉論は介護福祉専攻2年生の選択科目であり、社会福祉主事任用資格を満たすために必要な科目である。多くの学生にとっては直接児童福祉分野への関わりは少ないことも予想されるが、介護福祉士としての業務や訪問介護などで障害を持つ子どもへの支援を行う可能性もある中で、家族の構成員たる子どもや家族の問題を発見する立場になり得るという意識を持つことを踏まえた内容構成を行っている。

講義についての自己評価と今後の改善・工夫

それぞれの講義ではできる限り具体的な事例や社会問題を提示し、学生にとって各回の内容をイメージできるよう心がけた。障がい児保育は、1年生にとって障害などの言葉や専門的知識の内容に初めて触れるケースも考えられるため、より丁寧に語句の説明なども行った。また、障害に対しての正しい理解と援助を行う上での戸惑いや不安をできるだけ軽減できよう、映像教材や事例などを用いて具体性をもった講義を心掛けた。しかし、丁寧に講義を行う中で講義内容によって時間の配分に一部偏りが生じてしまった回もあったため、今後はより適切な配分ができるよう講義内容の見直しも行いたい。

ソーシャルワーク論Ⅳは、学生がこれまでに終えた各実習での経験も可能な限り振り返られるよう心がけ、学生自身の経験や体験と理論が結びつけられるように講義を進行した。

児童福祉論については、専攻の違いに配慮し、2年間の修学内容で触れる機会が少ない子どもの問題について、学生自身も子ども時代を過ごした当事者として、問題意識を持てるような事例や課題を準備した

それらを踏まえ評価を振り返ると、それぞれの各科目でその意図を理解されたように感じる。学生にとって、「この分野に対する興味・関心増した」、「授業に意欲を持って受講した」などの項目が概ね「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。しかし、専攻平均から低い項目や標準偏差の値が大きい項目が見られたため、まだ改善の余地は多分に残されていると思う。また2年生配当科目に

ついては、後期期間はそれぞれ実習期間を挟んでの講義であり、学生へ継続した学習意欲の動機付けについて講義内容の工夫が必要だと感じている、「学生に期待すること」に関連することだが、学生が教員へ質問しやすい雰囲気をどう作るのか、講義を受講するに当たり事前・事後学習を積極的に行う動機付けを工夫する必要性も感じている。

学生に期待すること

専攻平均でも同様の傾向が見られることだが、疑問点などについて質問する学生の少なさは課題として感じられる。講義の中で必ずしも受講者全員の理解度に合わせた進行ができないケースもある中で、学生自身が主体的に自らの進行業況を理解しそれを補うような姿勢を期待したい。少人数教育を実施しているからこそ、受け身ではなく積極的な姿勢をもつきっかけにしてもらいたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻　　職名：教授　　氏名：鈴木俊文

対象科目：福祉経営とリーダーシップ（講義）、介護福祉論Ⅰ（講義）、発展介護技術（演習）、介護過程Ⅱ（演習）、発展介護過程（演習）、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠA・B、ⅡA・B、介護福祉論（講義）、児童・家族福祉支援論（講義）、社会福祉演習、保育実践演習・卒業研究、介護概論・介護技術（講義・演習）

Ⅰ　授業の目標・工夫した点

当該年度は、カリキュラムマップに基づく教育課程の検証結果をふまえ、次の対応をはかった。介護福祉専攻担当科目では、1年前期の「介護福祉論Ⅰ」において、介護福祉論Ⅱのシラバスとの関係から、内容の重複、関連性を再確認し、介護福祉士の定義規定等の法令理解のほか、その具体的な介護福祉士の役割をイメージできるよう、静岡県介護福祉士会と連携したディスカッション型の授業を取り入れた。また、2年後期の「福祉経営とリーダーシップ」では、前年度に引き続き、介護福祉士養成課程新カリキュラムとしての対応を前提に、含むべき教育内容のほか、学習上の留意点を専門用語との関係で整理し，介護福祉士養成課程テキストを活用した学習を補強するための補助教材を作成し、活用した。

また、社会福祉専攻の担当科目では、「介護福祉論」が社会福祉士養成課程の指定科目から外れたことに伴い、近接する指定科目である「老人福祉論」の学習内容との関連や差別化について検討し、当該科目では高齢者以外の介護の対象や支援（医療的ケア児や障害児者）を強化した。このほか、「保育実践演習・卒業研究（社会福祉専攻）」、「介護概論・介護技術（歯科衛生学科）」等の授業では、当該年度も介護の対象やサービスマネジメントを含む支援技術に関心の高い受講者が数多く履修したため、介護技術やケマネジメントの演習を取り入れた。あわせて、医療・保健・福祉に関連する制度改正をふまえて、実践事例を活用した教材開発を今年度も継続し、演習や事例教材として更新した。

Ⅱ　自己評価と今後の課題

単独担当科目については、各評価項目の全体的な評価として学科平均より高い評価を得る傾向がみられた。これらの自由記述では、学習の難易度が決して低くないことを示しながらも、問いに対する理解の深まりを表す記述が多くみられた。この成果は、発問を切り口とする授業展開に加えて、授業内課題に厚みをもたせつつ、これらの個別添削によるフィードバックと、履修者全体での共有を目的とした授業時のフィードバックを重ねた結果であると考えている。

一方で発展介護技術等、複数教員による分担科目（演習）では、学科平均より低い傾向がみられた。これらの科目では、自由記述として教員による関わりの差（課題のボリュームや授業進度）についての記述がみられたため、担当教員間での連携を強化することを対策としたい。この対応にあたっては演習科目（技術研究）である特性をふまえ、教員のかかわりだけでなく、当該科目の目的や目標の理解、動機づけを高めていく関りも重要であると理解し、効果的な方法について検討していくことを今後の課題としたい。

社会福祉学科介護福祉専攻　　教授　　高木 剛

認知症の理解Ⅱ（講義）、介護過程Ⅰ（講義）、介護福祉論Ⅱ(講義)、発展介護過程（講義）、高齢者の生活の理解Ⅱ（講義）

I. 前年度（2022年度）の授業評価を踏まえた取り組み

1）認知症の理解Ⅱ

前年度（2022年度）の授業評価では、「Ⅱ　授業について」の平均点「4.62」であり概ね良好な結果であったが、学生からのコメントの中に「生徒の主体性を活かす授業（考えさせる授業）があってもいいのでは」との声があったことを受け、授業の中で認知症のある利用者の生活場面（事例）における対応の配慮・工夫について考える機会を設けたり、新聞の記事を題材とした課題により学生各人の考えをまとめてもらうなどの工夫をした。

2）介護過程Ⅰ

前年度（2022年度）の授業評価では、「Ⅱ　授業について」の平均点「4.72」であり概ね良好な結果であり、学生からのコメントも「くり返し説明して下さったのでよく定着した」「授業プリントがまとまっていて分かりやすかった」「重要なところを特に大事に伝えてくれた」などポジティブな声ばかりであったため、引き続き学生の期待に応えられるように説明の仕方やプリント作成に注力した。

3）介護福祉論Ⅱ

前年度（2022年度）の授業評価では、「Ⅱ　授業について」の平均点「4.45」、また「Ⅲ　遠隔授業について」の平均点「4.67」であった。学生のコメントは、「ユニパでの課題を授業で解説があり、分かりやすかった」とのポジティブな内容であったため、引き続き学生の期待に応えられるように丁寧に分かりやすく説明することを心掛けた。

4）発展介護過程

前年度（2022年度）の授業評価では、「Ⅱ　授業について」の平均点「4.76」と概ね良好な結果であった。また、学生のコメントとして、「ケアカンファレンスができたので良かった」「最後に今後注意することを教えて頂いて良かった」とのポジティブな内容であったため、引き続き学生の期待に応えられるように丁寧に分かりやすく説明することを心掛けた。

II. 今年度（2023年度）の授業評価に係る自己評価と今後の改善・工夫

１）認知症の理解Ⅱ

今年度（2023 年度）の授業評価では、「Ⅱ　授業について」の平均点「4.64」であり、前年度より 0.2 ポイント上昇した。また、学生のコメントとして、「とても丁寧に細かく認知症についての特徴を教えて頂き、学べたことがよかったです」「毎時間の資料が分かりやすかったです。大事な語句などを何度も教えてくれるので助かりました」「簡潔かつ分かりやすかった」など、19 件がポジティブな内容であった。一方で、「謎の間があるところ」を改善点として指摘するコメント（1件）があった。

上記の結果から、概ね本授業に対する学生の満足感を得ることができたと考えるが、更に満足度を高められるように、説明の途中で間が生じないように意識して授業を展開したい。

２）介護過程Ⅰ

今年度（2023 年度）の授業評価では、「Ⅱ　授業について」の平均点「4.54」であり、前年度よ

り 1.8 ポイント低下した。また、学生のコメントとして、「認知症の方のアセスメントなどを学べたことが良かったです」「プリントに情報が詰まっていて、一覧性のあるもので学びやすかった」「大事な語句を繰り返し説明してもらい、覚えやすかったです」など、18 件全てがポジティブな内容であった。前年度より 1.8 ポイント低下した要因として、アンケート項目の「安全についての指導や配慮が十分なされていた」については、実習科目のみ回答することになっていたが、学生が誤ってマークした（しかも評価の平均点「4.0」と低調である）ことが影響したと考えられる。

上記の結果から、概ね本授業に対する学生の満足感を得ることができたと考える。引き続き満足度を維持できるように、授業の仕方や資料作成に注力したい。

３）介護福祉論Ⅱ

今年度（2023 年度）の授業評価では、「Ⅱ 授業について」の平均点「4.80」であり、前年度よりも 3.5 ポイント上昇した（今回、遠隔授業は実施しなかったため、その評価は無し）。学生のコメントとして、「プリントが見やすい」「映像資料やレジュメが分かりやすいです」「分かりやすい授業資料でした」「虐待について学ぶことが出来て学びになった」「聴き取りやすい声でした。ありがとうございました」など、６件全てがポジティブな内容であった。

上記の結果から、概ね本授業に対する学生の満足感を得ることができたと考える。引き続き高い満足度を維持できるように、授業の仕方や資料作成に注力したい。

４）発展介護過程

今年度（2023 年度）の授業評価では、「Ⅱ 授業について」の平均点は「4.35」であり、前年度より 4.1 ポイント低下した。学生のコメントとして、「実践、カンファレンスで終わらず、最後に総評があったので、自分に至らない点や修正すべき点を改めて確認できてよかった」「実習中に実践的な学びを得ることができた」「ＩＢ から介護過程の展開を行ってきたが、ＩＢ、ⅡA、ⅡＢ と段々アセスメントの仕方や記入の仕方、考慮すべきことなどをまとめる力や考える力が身に付いたと感じた」と、ポジティブな内容が目立った反面、「先生により熱意が感じられたり、授業が丁寧だったが、一部の先生がダメだった」との指摘（１件）があった。

上記の結果を踏まえ、本授業を担当する教員が熱意をもって丁寧に指導できるように、今まで以上に授業の展開方法などについて情報共有していきたい。

学科：社会福祉学科・介護福祉専攻　　職名：准教授　　氏名：奥田都子

対象科目：家族福祉論（講義）、生活支援技術Ⅰ・Ⅳ（演習）、介護レクリエーションⅠ（演習）、
介護実習指導Ⅱ（演習）、子ども家庭支援論（講義）

Ⅰ　授業の目標・工夫など

介護福祉専攻対象の「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」、社会福祉専攻及びこども学科対象の「子ども家庭支援論」ではグループワークやロールプレイなどを導入してアクティブ・ラーニングを実践するとともに、毎授業ごとに記載するリアクションペーパーによる学生との対話を心がけている。

介護福祉専攻対象の「介護実習指導Ⅱ」では、「卒業研究」に相当する「介護実践研究」を令和 4 年度から導入し、10 週間の実習での介護実践を科学的に探究し、介護実践研究報告書にまとめるとともに、専攻の全学生と教職員が出席する介護実践研究発表会において発表することを義務づけている。卒業年次の学生全員が発表するとともに、全学生が質問者の役割を担う。

社会福祉専攻・こども学科対象の「子ども家庭支援論」では、保育現場を想定した事例において、家庭支援の実践力向上をはかるため保護者対応失敗事例のディスカッションや、改善に向けてのロールプレイを重ねることにより学習効果をねらった。また、冬休み課題では、子育て支援関連法制度の理解を深める目的で、制度の内容をカルタの読み札として作成する課題を与え、年始の授業にカルタ大会を設定して対戦形式で活用した。読み札作成過程において、制度の特色や類似の法律との差異についての理解を深め、勉強していないと判断しにくい札作りを工夫することによって主体的に学べること、対戦方式で学習成果を自分で測れることなど、学生の意欲喚起と授業効果の向上をねらった。

Ⅱ　アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

担当科目の評価は、すべて専攻平均点を上回った。しかし令和 3～5 年度の評価の推移をみると、令和 5 年度の評価点は 4 年度より低下した。（「介護レクリエーションⅠ」4.74↗4.63↘4.48、「生活支援技術Ⅰ」4.51↗4.6↘4.46、「家族福祉論」4.24↗4.63↘4.54、「子ども家庭支援論」4.2↗4.34↘4.32、「介護実習指導Ⅱ」4.75→4.75↘4.45）。

これらの科目では、コロナ感染拡大期はロールプレイやグループワークを縮小し、授業効果を上げにくかったが、令和 4 年度にグループワークやロールプレイを解禁した結果、授業満足度が回復したのではないかと考えている。自由記述では、「ロールプレイを用いて、どのような支援ができるのかを考えることができた（家族福祉論）」「ロープレイを通して、難しい状況への対応方法を考えることができて良かった/かるたやロールプレイ等、他学生と交流できる場があって楽しかった（子ども家庭支援論）」等、ロールプレイを中心にアクティブ・ラーニングへの支持が高かった。

令和4年度から「介護実習指導Ⅱ」の内容に「介護実践研究」が加わり、学生の負担は高まっているが、取り組みへの評価は概して高く、自由記述からは「自分の興味のあることについて研究して、実践や研究発表を通して今後の課題などを抽出できたので、最後まで頑張りきって良かった」「今まで文献や論文をしっかり見る機会がなかったが、研究によって読むことになり、自分の中で考えが深まった」などの声がみられる。その一方で「時間が限られている中での研究で難しい」「実習中に研究も介護過程も進行するのがつらかった」など、過密なスケジュールに苦しむ様子も語られていた。丁寧な個別指導を通して学生の研究関心を引き出し、サポートと自主自立のバランスを考えながら学習を支援していく必要がある。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式

は、学びの意欲喚起や、授業への関心・集中力の向上において効果が確認できた。また、介護実践研究における指導の成果も顕著であったため、今後も、学生との対話と意欲を引き出す工夫を模索し、学生が積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたいと考える。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻　　職名：准教授　　氏名：尾﨑剛志

対象科目：障がいとコミュニケーション技法（演習）、障害者の生活の理解Ⅱ（講義）
障害とコミュニケーション技法（演習）、障害者福祉論（講義）、障害者の生活の理解Ⅰ（講義）

学科・専攻の平均よりも全体として低い評価にあり、特に、主体的に学びに取り組めるように工夫していた、という項目の評価が低い。また、1年生科目においては、課題が多いと感じている学生も一定数いるようである。コメントでは「難しかった」というものもあり、難易度としてはそれほど高くないものの、情報量が多く、詰込みになっている現状を再認識した。現在の授業は PPT を使用し、PPT 資料を配布しているため、この点についての課題はそれほどないが、科目として学ぶべき内容が多く、それらを網羅すると1回当たりの授業のボリュームが多くなり、スライドも可能な限り減らそうとすると、スライド内の文字数が多くなり見えづらいという課題がある。一方で、テキストを使用しながら進めている授業に関しては平均的な評価となっていることから、進め方についての工夫が求められる。

評価の傾向としては、自己評価、授業評価ともにとても高い一群と低い少数の学生が見られ、評価にかなりばらつきが見られる。平均的な学習量よりは、若干減らしているつもりではあるが、もう少し理解を確認しながら進められるように、工夫を加えていきたい。

大学等の教育機関では、事前・事後学習を含めた時間数を単位として設定していることから、ある程度の事前・事後課題が出ることについては覚悟をもって臨んでもらえると、前で授業を進める担当者としてはありがたい。

令和6年度は授業実施後に理解の程度を確認するために、コメントシートの提出を求め、積み残しがなるべく少なくなるように進行できればと考えている。また、一方的に講義をするのではなく、学生自身に考える機会を設けるように工夫をしていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻　職名：准教授　氏名：木林身江子
対象科目：身体のしくみⅠ（講義）、介護過程Ⅳ（講義）、医療的ケアⅠ（講義）、
医療的ケアⅡ（講義・演習）、医療的ケアⅢ（講義・演習）

「身体のしくみⅠ」は、テキストを中心に必要に応じて別途資料を配布して授業を実施した。昨年度と比較すると全体的に評価が向上した。授業は学生の理解度に応じて各講の量や範囲を調整し、課題の質・量についても配慮した。学生からは特にパワーポイントや資料の内容が分かりやすかったとの評価が多くきかれ、理解を高める要因になったと考えられる。また、演習を少し含めた点や小テストを複数回実施した点についても肯定的に受けとめられていた。演習や小テストは、身体のしくみへの関心・理解につながったと考えられる。その他、学生自身の授業の臨み方に関しても「必要に応じて質問した」「授業の内容はよく理解できた」という項目が例年に比べて高い評価であり、学生自身の努力がみられたという側面においても良い授業運営ができたと考える。成績評価の方法に関しては、中間評価を設けるなど学生の理解と意欲が高まる授業運営に努めたいと思う。

「介護過程Ⅳ」は、内部障害のある人に対し、医学的知識に基づいた適切な介護・生活支援計画を立案するという介護過程の展開能力を養うことを目指している。対面授業を基本とし、数回の遠隔授業では対面の授業内容を復習することで回答ができる課題を提示した。配布資料については前年度の内容を精査し、図表やイラストを盛り込んで視覚的にも分かりやすく理解を深められるよう更なる改善に努めた。特に学生からの評価が高かったのは穴埋め形式の資料であり、学生の理解度に応じた授業展開ができたと考える。全体的に評価は昨年度同様であったが、学生自身の「疑問点を必要に応じて質問した」「予習復習をして理解を深める努力をした」項目については例年より高い評価であり、概ね本科目の目的は達成できたと考えられる。

「医療的ケアⅠ」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や喀痰吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的考え方や知識および実施手順について理解することを目的としている。対面を基本とし数回の遠隔授業を組み合わせて実施した。対面授業では、医療的ケアの基本事項、感染予防策などの講義をはじめ、尊厳、倫理上の留意点など、介護福祉士として必要な視点・思考・対応を考えさせるような機会も作ることができた。また、バイタルサイン測定や感染予防策に関しては、演習も含めて具体的な手順や留意点の学習機会を提供することができた。全体的な評価は学科平均を上回り、「分りやすかった」と好評価を得た。今後、映像視聴やグループワークも取り入れるなど、教授方法の工夫に努めていきたいと考える。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、対面授業の内容、質、進度については概ね適切であったと評価できた。遠隔授業では、テキストの各章にある設問や国家試験を意識した問題を課題として提示した。提出されたレポートの内容からは、概ね適切な理解がされたと評価することができた。一方、技術演習では、医療的ケアⅡで課題となった教員間の技術指導の相違という点について医療的ケアⅢでは改善することができた。また、1グループあたりの学生数を少なくし、技術を苦手とする学生への指導も丁寧に行うことができた。教員による個別指導は、細かい部分の指導や不確かな知識・技術の修正等ができ、学生の高い満足度につながった。学生自身も疑問を解消することで能率的に練習に励み、技術試験にも意欲的に取り組むことができており、本科目の目的は達成することができたと考える。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻　　職名：講師　　氏名：安瓊伊

対象科目：基礎介護技術（演習）、応用介護技術（演習）、発展介護技術（演習）、発展介護過程（演習）、介護実習指導Ⅱ（演習）、介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

Ⅰ　授業の目標・工夫

「基礎介護技術」と「応用介護技術」は、要介護状態の人に対する介護のあらゆる場面に汎用できる介護技術の習得と、介護技術の論理的な根拠と留意点を理解し、利用者の状態の変化に合わせて応用できる実践力を養うことを目標とする。介護技術が習得できるように協力して演習できる2～3人のグループを編成し、授業時の学生の理解度や技術の習得状況を確認しながら演習中は教員から学生に積極的に声をかけるように心かけ、複数の教員が細かな指導を行った。授業に用いる手順書は前年度の授業での改善点を加え、学生の理解を高めるよう事前に教員間で確認をして実演した。

「発展介護技術」は、少人数での演習を通して、取得した基礎的知識・技術をもって個別性に応じた介護技術を展開できることを目標とし、事例を用いた技術研究を展開した。学生とのグループワークの時間が多いため、担当学生が自主的に役割を決め、協力してグループワークを進めるよう、教員からの指示は最小限にし、学生の取り組みを支援するよう心かけた。

「介護実習指導Ⅱ」は、2 年次の介護実習ⅡA と介護実習ⅡB と連動して介護実践に必要な知識と技術を統合し、介護過程を展開するとともに、介護実践を科学的に探究し、報告書を作成し報告することを目標とし、適時に課題に取り組めるよう年間の流れを提示し、多数の個別指導を通して各実習課題や報告書の作成を支援した。

Ⅱ　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「基礎介護技術」と「応用介護技術」は、学生から積極的に授業に参加できた、分かりやすかった、気軽に質問できる環境であったという意見が多かった。学生の理解と技術習得程度を確認しながら、学生が質問しやすい雰囲気をつくるよう心かけながら、介護現場で改善されつつある介護技術を取り入れ、丁寧に指導していきたい。

「発展介護技術」は、グループ内で積極的に話し合い協力することができたという肯定的な意見があるが、事例提供学生に負担が集中していたため、多職種と連携し協働する介護職として自分の意見を述べ、積極的にグループワークに参加するよう一人ひとりへの動機づけを工夫したい。

「介護実習指導Ⅱ」は、令和 4 年度より新たに取り組んでいる介護実践研究が通年で行われていて、限られている時間で難しく大変だった、実践や研究発表を通して今後の課題が抽出できたなどの学生意見があった。1 対 1 の個別対応による学生指導を通して、対象学生全員が長期にわたる実習を終え、実習中取り組んだ介護実践研究を報告書にまとめ発表することができたが、学生間に偏差がみられた。学生各自が実践研究のテーマを自身の学習や実習での体験をふまえて決められるようより分かりやすい指導方法を考え、細かな個別対応をしていきたい。

Ⅲ　学生に期待すること・学生への要望等

介護技術の授業には複数の教員が指導をしているので、理解できてないことや疑問点などがあるときには質問をして教員と一緒に不明な部分を解消していき、授業時間内に演習を繰り返し行い、介護技術を身につけるよう積極的な姿勢で授業に臨んでほしい。

学科：社会福祉学科　職名：講師　氏名：濵口晋
対象科目：コミュニケーションⅠ（講義）、コミュニケーションⅡ（講義）、介護過程Ⅱ（演習）
介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

Ⅰ　授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」の授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。この2科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用と位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、DVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習も行った。

Ⅱ　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ」【Ⅱ　授業について　平均点 昨年度 4.45→今年度 4.20　範囲 3.88～4.31】

「(10)授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」は、過去において類似した質問項目は 4.00 未満だったこともあり、昨年度 4.42 と最近改善傾向にあったが、今年度は 4.20 と評価が若干低下した。「(12)教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(13)教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」・「(14)教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫していた」の項目においても、昨年度 4.47 から今年度 4.19 と評価が若干低下した。『説明が長く、わかりづらかった』との意見もあった。過去にも、『パワーポイントのスライドが速い』や『話す口調やタイミングによりわかりにくい』などの意見もあり、今後もわかりやすく話すよう心掛けたい。コロナ禍のマスク越しやオンラインの授業では、双方向の授業が展開できるよう、多くの配慮をすることができていたが、ほぼ平時に戻った今年度は、授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものではなかったものと受け止めている。授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、修正し、双方向の授業ができるように改善していきたい。

「コミュニケーションⅡ」【Ⅱ　授業について　平均点 昨年度 4.03→今年度 4.74　範囲 4.63～4.81】

「コミュニケーションⅡ」については、昨年度に比べ改善した。昨年度、『パワーポイントのスライドと配布資料の内容が異なっている』という意見があり、作成時に確認するにように心掛けた。その結果、『スライドが見やすい』『スライドと映像資料で理解が深まった』等の意見があった。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、シラバスに沿いつつも、授業内容も柔軟に修正できるように改善していきたい。

「介護過程Ⅱ」【Ⅱ　授業について　平均点　昨年度 4.02→今年度 4.64　範囲 4.50～4.79】

「介護過程Ⅱ」についても、昨年度に比べ改善した。複数教員のオムニバス形式の授業であり、各教員が内容について見直しをした結果、『介護過程をふまえ、様々な介護サービスを知ることができた』『学

びが深まった』等の肯定的な意見が多くなった。

「介護実習指導Ⅰ」【授業について、平均点　昨年度 4.14→今年度 4.73　範囲 4.69～4.81】

「介護実習指導Ⅰ」については、昨年度に比べ改善した。『実習の心構えを学ぶことができた』『介護実習ⅠAから介護実習ⅠBに進むにつれ、学びが深まった』等の意見があった。また、毎年、『(実習指導者・卒業生の)ゲストスピーカーの話がためになった』という意見が多く、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を今後も心がけていきたい。

「介護福祉演習」【授業について、平均点　昨年度 4.70→今年度 4.56　範囲 4.39～4.61】

「介護福祉演習」については、「(13)教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫していた」は昨年度 4.71→4.39 に低下する等、昨年度に比べ評価は低下したものの、学力評価試験においては好成績を収め、5年連続介護福祉士国家試験合格率 100%も達成した。また、養成施設別合格率も合格者数で4年連続の全国上位の結果を収めることができている。一方で、コロナ禍以降、この科目ではユニバーサルパスポートを積極的な活用により、学生の自主勉強を促す効果を挙げていたが、個々の学生の学習状況を十分に把握できなかった可能性がある。今年度も『自習室の開放があり良かった』との意見があり、今後も教室以外に演習室を『自習室』として開放する等個人やグループで学習しやすい環境を整え、一人ひとりの状況に応じた学習支援を行っていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻　　職名：助教　　氏名：大石桂子
対象科目：介護過程Ⅱ（講義）、認知症の理解Ⅰ（講義）、基礎介護技術（演習）、応用介護技術（演習）、発展介護技術（演習）、発展介護過程（演習）、介護実習指導Ⅰ（演習）、介護実習指導Ⅱ（演習）

・基礎介護技術、応用介護技術

学生からは、授業には積極的に参加ができたこと、教員に対して、不明点や疑問点を聞きやすかったという意見が多かった。ただし、講義に対して辛かったというコメントも見られている。総合的には、介護技術の習得が十分にできたという意見が多かった。講義については改めて教員間で内容や授業形式の検討をする。また、演習の時間が多いため、グループごとで取り組みの速度が違うことに対する戸惑い、教員によって指導が違う場面があるとの声が聞かれたことから、授業運営について再度検討したい。

・発展介護技術

主にグループワークの時間が多いため、担当学生の自主性を高められるように関わった。グループワーク開始時に学生に役割を持ってもらうことで、学生自身で運営を行うようになっていった。授業全体としては、グループワークの難しさ、協調性の有無に関する意見が聞かれていた。

・認知症の理解Ⅰ

講義内に認知症関連書籍に触れる時間を設けたり、認知症ケアに関するディスカッションを実施したりと、学生が授業内容に関心を持ち、積極的に参加できるように工夫をした。質問等については、質問カードを用いて学生からの意見、質問が出やすい状況を設けたが、アンケートでは、学生から「積極的な質問ができた」という項目が少し低かった。静岡県内で先進的な認知症ケアを取り組んでいる施設の施設長をゲストスピーカーに招聘し、実際のケア場面についても検討できる機会を設けた。

・介護過程Ⅱ

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。担当する授業最終回に授業に対する感想を書いてもらったところ、理解が深まった、ディスカッションがあってよかった、毎回前回の復習から入っていたので良かったという意見をもらった。

・発展介護過程

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。個別指導、ケアカンファレンスにおいては、学生間での積極性に差が見られた。カンファレンスを実施する人数が少なく、議論が止まってしまうことも多くあったことが課題である。

・介護実習指導Ⅰ，介護実習指導Ⅱ

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。学外実習に関連する科目であることから、引き続き教員間で連携して取り組んでいきたい。

学科・専攻：こども学科　　職名：教授　　氏名：小林佐知子

対象科目：

＜前期＞「心のしくみ」（講義、介護福祉専攻１年）、「教育相談」（講義、こども学科２年）、「保育の心理学」（講義、こども学科・社会福祉専攻１年）、「子ども家庭支援の心理学」（講義、こども学科・社会福祉学専攻２年）

＜後期＞「発達と老化Ⅰ」（講義、介護福祉専攻１年）、「教育心理学」（講義、こども学科２年）

1. 授業についての自己評価

評価を受けた科目はすべて対面授業であった。一部を遠隔授業（オンデマンド）で実施したコマもあった。

前期の「心のしくみ」「教育相談」「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」は、アンケートの『あなた自身について』（授業への意欲や態度など）、『授業について』（教員の授業方法や対応の適切さ）のどちらも学科・専攻平均点を上回っており、比較的良い評価であったといえる。後期の「発達と老化Ⅰ」も同様の結果であったが、「教育心理学」のみ、『授業について』、『あなた自身について』ともに学科・専攻平均を下回っていた。原因は、昨年度と同様に“自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した”“自分は、予習復習をして理解を深める努力をした”の項目が低かったためと思われるが、他の授業に比べて内容が難しいことも関連していると思う。自由記述を見ると、全体的に“楽しい授業”“おもしろい”“わかりやすい”“心理テスト”“グループワーク”というワードが散見されたため、アクティブラーニングの要素を取り入れることができていると感じた。

2. 今後の改善・工夫

過年度と同様、授業外の課題がうまく設定できていない。授業外の課題を設定する、参考図書を紹介するなど改善の余地がある。

3. 学生への要望等

私語がない、グループワークに積極的に参加する、コメントカードはしっかり記入するなど、授業態度がとてもよいので授業がしやすい。そのため、たまにスマホを見ている人がいるととても目立つ。注意をすると授業の流れが途切れて雰囲気にも影響するのでスマホはカバンに入れておいてほしい。

学科：こども学科　　職名：教授　　氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義）教育課程・保育計画論（講義）幼児教育者論（講義）
保育内容（言葉）（演習）　保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導（共同）教職実践演習（共同）卒業研究（共同）

こども１年生前期科目「保育内容（総論）」「幼児教育者論（講義）」社福２年生前期科目「保育者論」は、学生の評価にあったように、グループワークや映像を使ったことが功を奏して、「理解しやすかった」という声が多かった。特に、「幼児教育者論」は、2 年生と合同の授業だったことで、「グループワークの際に２年生と交流できてよかった」との意見があり、これは２年生にも感謝である。昨年と同様、４番目の質問項目「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」について、同一の授業であるのに１年生は 3.74 点、２年生は 4.17 点と差があったのは、やはり１年間の学修や実習の経験から、２年生の方がより疑問や質問が多く浮かぶからではないかと思う。こども学科・社会福祉学科１年の「保育内容総論」は、「事例から学ぶことが多かった」という声が多く、「保育指針など根本的なことについて学べて理解が深まった」という嬉しい声もあったことは良かったと思う。

こども学科１年後期科目「教育原理」については、「調べ物が大変だったけど、楽しかった」という意見があり、学生自ら調べることが深い学びに有効であったといえる。

こども学科・社福１年後期科目「教育課程・保育計画論」については、「実際に何度も指導案を書いてみたり、他の人のものも見られるのがよかった」という声が多く、今後も同様な方針で進めることが有効であると感じた。

こども学科・社福１年後期科目「保育内容指導法（言葉）」は、今年の学生には後半の児童文化財に関する授業が高評価であった。近年コロナ感染予防でなかなかできなかった「絵本の読み聞かせ」の実践ができた学年であったためか「読み方や選び方など実習前に特に参考になった」との声があった。学生たちも、高校でも密を避ける授業形態であったこともあり、久しぶりに人と聞き合う授業が新鮮だったのではないかと思う。

こども学科２年の１年後期から継続している「教育実習指導」については、特に設問４の「疑問点に関する質問」、設問５の「予習、復習」に関する評価が高く、大変な課題を与えたにもかかわらず、自分たちの力がついたとそれに応えてくれたことを嬉しく思う。

私の授業科目の評価が、ほぼ平均近くに集まっていることを考えると、本学の学生たちには今の授業の方法が合っているのではないかと思っている。

学科・専攻：こども学科　　職名：教授　　氏名：藤田雅也
対象科目：保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）（演習）、保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）（演習）、
保育内容指導法（表現）（演習）、子どもの表現Ｂ（演習）、介護レクリエーションⅢ（演習）

Ⅰ．授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

〇保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

〇保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

〇保育内容指導法（表現）

保育の内容としての 5 領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

〇子どもの表現Ｂ

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

〇介護レクリエーションⅢ

造形表現活動（描くこと・つくること・みること）を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

Ⅱ．授業についての自己評価と今後の改善・工夫

〇保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ　授業について」の項目については、当科目平均点が 4.84 と高い数値結果であった。中でも、「教員に授業に対する熱意が感じられた」（4.94）、「教員は、学生に対して誠実に対応していた」（4.94）、「教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」（4.91）などが高い結果であった。

授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にした。自由記述には、「造形の楽しさと留意点を知ることができた」、「実際に保育現場で行うことができるワンポイントアドバイスをたくさん知ることができた」、「この授業での学びを実習で生かして、子どもたちに造形を楽しんでもらえるような工夫、環境づくりをしたい」などが挙げられた。

〇保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）

「Ⅱ　授業について」の項目については、当科目平均点が 4.88 と高い数値結果であった。授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。自由記述には、「実習で活かしていきたい内容ばかりで、私自身も造形表現に対する興味・関心が高まったと感じる」、「主体的、自主的に動ける環境で、色々なチャレンジがで

きた」などがあった。

〇保育内容指導法（表現）

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ　授業について」の項目については当科目平均点が 4.92 と高い数値結果であった。中でも、「教員に授業に対する熱意が感じられた」（4.95）、「教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」（4.95）、「教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた」（4.95）、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」（4.95）などが高い結果であった。

授業では、5 領域を総合的に学ぶオリジナルシアターの制作と発表や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。自由記述には、「実際に保育現場で活かしていけることを、みんなで共有しながらできたのがよかった」、「活動の振り返りが丁寧で、学びを深められた」などが挙げられた。

〇子どもの表現 B

「Ⅱ　授業について」の項目については当科目平均点が 4.83 と高い数値結果であった。授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。自由記述には、「学生の願望を全て聞き入れてくれて、製作や活動がしやすかった」、「先生は、毎回学生の作品の良い点などを褒めて下さったので、自分に自信がついた」などが挙げられた。

〇介護レクリエーションⅢ

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ　授業について」の項目については当科目平均点が 4.87 と高い数値結果であった。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にした。自由記述には、「授業内容について、生徒の意向も考慮してくれて良かった」、「先生との距離が近く、楽しかった」などが挙げられた。

学科・専攻：こども学科　　職名：准教授　　氏名：及川直樹

対象科目：保育内容指導法（健康）（演習）

「Ⅰ　あなた自身について」と「Ⅱ　授業について」の平均点は，いずれも 4.5 点以上であり，学科の平均点とほぼ変わらない水準であった。ただし，Ⅰでは，「自分は，疑問点を必要に応じて教員に質問した」の平均点が 4.00 点と，全ての項目を通じて最も低かった。そのため，毎回の授業の進度に応じて，また授業終了直前に疑問点があるかどうかを確認する時間を設けるようにしたい。なお，自由記述では，全般的に事例検討に対して肯定的な評価が得られた。事例を取り上げたり，その内容について考察して発表したりする時間を，昨年度よりも増やしたことの効果が認められたため，次年度以降も継続していきたい。

学科・専攻:こども学科　　職名:准教授　　氏名:松浦崇

対象科目：社会的養護Ⅰ（講義）、社会的養護Ⅱ（演習）、子ども家庭福祉（講義）、
子育て支援（こども学科）（演習）、子育て支援（社会福祉専攻）（演習）
人間関係と援助技術（講義：オムニバス）

Ⅰ　授業の目標・工夫など

「社会的養護Ⅰ」・「Ⅱ」で学ぶ社会的養護（施設養護・里親制度）は、多くの人にとってこれまでの生活で触れる機会が少なく、具体的なイメージを持ちにくいものとなっています。そのため、問題を他人事としてではなく身近な問題として捉えることができるよう、映像資料をはじめ、新聞記事、当事者による漫画・手記などの資料を活用し、当事者の言葉・思いに触れる機会を増やすことを心掛けました。

「子ども家庭福祉」・「子育て支援」においては、こども家庭庁の創設、こども誰でも通園制度をはじめとする新たな子育て支援施策の検討など、社会の動向をふまえながら、各種制度・施策の概要や、支援が求められる社会的背景について理解を深めることができるよう努めました。

全学共通科目である「人間関係と援助技術」については、受講生が複数の学科・専攻・学年にまたがることから、各領域（歯科・社会福祉・介護・こどもなど）で共通して課題となる事例の活用等を通して、授業内容の充実に努めるとともに、専門職間の協働、多職種連携のあり方等を学ぶ機会となるよう心掛けました。

Ⅱ　授業についての自己評価と今後の改善・工夫

全体として、高い評価を得ることができたと考えています。

自由記述では、「資料が豊富で理解が深まった」、「レジュメと資料がわかりやすかった」など、授業の方法について評価していただきました。今後も、資料を適切に活用しながら、丁寧な授業に努めていきたいと思います。

また、「今まで以上に子どもについて、よく考えるきっかけになりました」、「すごくいろいろと考える授業で、視野も広がったと思います」など、授業を通して、子どもをめぐる問題への理解・関心が高まったという声をいただくことができ、授業で目的としていたことは一定程度達成できたものと考えています。

他方、「教員に質問した」、「予習復習をして理解を深める努力をした」など、「あなた（学生）自身の取り組みについて」の項目については、低めの評価となりました。授業外の主体的な学習を促すことができるような働きかけについて、検討していきます。

また、「人間関係と援助技術」における遠隔授業・学科間でのグループワークについては評価が高かったため、今後もより良い内容となるよう、改善を続けていきます。

Ⅲ　まとめ

社会において、さまざまな取り組み・施策が矢継ぎ早に進められる一方、子どもの育ち・子育てをめぐる困難は、深刻さを増しているように思われます。今後も、授業では、社会で今起きている事柄や、子どもや保護者をはじめとする当事者の方の思いに触れることを大切にしつつ、保育者・福祉職として求められる専門性のあり方について、考えを深めていきたいと思います。

学科・専攻：こども学科　　職名：講師　　氏名：山本学
対象科目：保育内容の理解と方法Ⅰ、Ⅱ（音楽）（演習）、子どもの表現Ａ（講義）、音楽通論（講義）、保育内容指導法（表現）

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

［保育内容の理解と方法Ⅰ、Ⅱ（音楽）（山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷲巣貴乃、鈴木慶子）］

Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を 45 分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を 45 分学習し、選択音楽として 45 分、声楽、ギター、和太鼓、音楽療法、リトミックのいずれかを学習する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

評価は概ね平均を上回っていた。17 学生対応、18 評価の公平性などは特に高評価であった。自由記述において、「ピアノの授業の段階を自分に合わせることができた」、「ペースを合わせて練習できたこと」など学生個人への細かい対応が書かれていた。

［音楽通論］

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるような工夫を行っている。ピアノ連弾を実践したり、映像と音楽鑑賞したりなど、動きのある授業づくりをしている。

評価はⅠ、Ⅱ、Ⅲ全ての項目で平均を上回っていた。自由記述においては、「様々な視点から音楽を学べたこと」、「ピアノを演奏する機会があって楽しかったです」などがある。

［子どもの表現 A］

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。クレ読みを取り入れ、楽譜を速く読めるようにする演習や保育と音楽の論文を読む機会を作るなどの工夫をしている。評価は学科平均とほぼ同じであった。自由記述で「黒板の字が小さい」というものがあったので改善していきたい。

［保育内容指導法（表現）］

前期はオリジナルシアター、後期は模擬保育や手遊び歌の実践、昔遊びの音楽などを取り扱う。評価は3項目で全て平均を上回った。自由記述で「自分で考えたり、体を動かしたりすることが多くてわかりやすかった」、「楽しく表現について学ぶことができた」などがあった。

学科・専攻：こども学科　　職名：助教　　氏名：崔美美
対象科目：幼児理解（講義）、保育内容指導法（人間関係）（演習）

1. 授業の工夫（授業目標）

○ 幼児理解

幼児理解の意義を理解し、幼児理解を深めるための保育者の基礎的な態度を理解する。保育における幼児の生活や遊びの実態に即して、幼児の発達や学び及びその過程で生じるつまずき、その要因を把握するための原理や対応の方法を考えることができるようにする。

○ 保育内容指導法（人間関係）

乳幼児の認識・思考、動き等を視野に入れた保育の構想の重要性を理解する。領域「人間関係」の特性や乳幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができるようにする。領域「人間関係」の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができるようにする。

上記の授業目標を達成するために、授業における保育現場での参与観察、保育現場の写真や動画、保育者からの経験話などを通して、保育の実際に触れることで、子どもや保育に対する理解を深めることができたと考える。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○ 幼児理解

アンケート項目のうち、「Ⅰあなた自身について(4.68)」と「Ⅱ授業について(4.77)」において、当科目平均点が学科・専攻平均（Ⅰは 4.59、Ⅱは 4.74）を上回った。「Ⅲ遠隔授業について」）においては、当科目平均点(4.33)が学科・専攻平均（4.43）を下回った。

自由記述において、ビデオや園見学等で（保育ついて）「具体的に知ることができた」ことや、「事例なども交えて、とてもわかりやすく丁寧に授業をしてくださって興味・関心が増えた」などのことから、保育の理論とともに保育の実際に触れることの重要性について改めて気づかされた。

○ 保育内容指導法（人間関係）

アンケート項目のうち、「Ⅰあなた自身について(4.51)」と「Ⅱ授業について(4.59)」において、当科目平均点が学科・専攻平均（Ⅰは 4.59、Ⅱは 4.74）を下回った。「Ⅲ遠隔授業について」）においては、当科目平均点(4.56)が学科・専攻平均（4.43）を上回った。

自由記述において、「人間関係における子ども理解や関わり方について深く学ぶことができ、実習でも活かしていきたいと思った」「事例をふまえて、人間関係の領域で何が必要かを考えることができて良かった」「学生に寄り添ってくれる授業で、学びに対する意欲が高まりました」とのことから、保育における人間関係に対して、学生自ら学び、自ら考える力を育てることができたと考える。

今後の改善・工夫として、遠隔授業での進め方や学生への配慮を工夫すること、授業で安心して質問できる環境を整えることに心がけたい。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

授業において、受講者同士で授業内容について対話や発表をする（グループワーク）など、自ら能動的に学ぶことを促進する機会（主体的、対話的で深い学び）を有効に活用してほしい。